

水の惑星

water
planet

川の声を聞こう。

私は、山里の駅を降りて、川沿いの道を歩いた。
十キロメートルほどの距離だ。

川の声を深く聞く恩恵にあずかるためには、せめてこのくらいは歩いて自らが汗を流さなければならぬいと思った。

大きな道を外れて左手の小道に入り、少し下りると橋があった。小さな滝が心地よい音を響かせている。

階段を下りると、ここからは山道だ。私は、すがすがしい空気を深く吸い込みながら、私のこの足で土や岩の感触を確かめつつ歩いた。川の流れが奏でる心地よい響きが、私の全身を通して心に染み込んだ。日頃、あんなに一喜一憂していた雑多な事柄が、全くちっぽけなもののように感じられる。まるで、この私を包み込む自然と私自身とが一つになつたような感覚に浸りながら、時がたつのも忘れて私は歩みを進めた。



水の惑星

つり橋から見下ろす景色は、まさに絶景だった。

私は、川の近くまで下りて、岩の上に腰を下ろした。水筒の水でのどの渇きを潤した後、大きな岩の上で大の字に横になつた。聞こえてくるのは、川の流れの音だけだ。





その音は、魂を揺さぶる力強い響きだった。
私は、その響きを全身の感覚で受け止めながら、目を
つぶつて思いを巡らせた。

この圧巻の風景は、水の流れが十万年以上の歳月をか
けて山を侵食し岩を押し流し、この大地に刻みつけてき
たドラマの証だ。私は今、その壮大な芸術作品の中にい
る。

水は、このような、数えきれないドラマを繰り広げな
がら、今の地球をつくってきた。

地球は、その表面の約三分の二が水で覆われていて、「水
の惑星」とも呼ばれている。

そのほとんどは海水で、淡水はわずか二・五%程度に過ぎ
ない。しかも、その淡水の大部分は氷や氷河だ。川や湖
など、人が利用しやすい水に限ると、その量は地球全体の
水の約〇・〇一%でしかない。この貴重な約〇・〇一%の
水を生み出すために、地球は絶妙なバランスを保っている。

地球上の水は、さまざまに姿を変えながら、海、空、そして陸を循環する。

海から、そして地面や植物から、多くの水が蒸発して天空へ昇る。雲ができる、雨や雪が陸地
や海に降り注ぐ。陸に降った雨や雪は川や地下水となり、やがて海へと流れ込む。それは、
地球全体の壮大なシステムによってつくり出されたみごとな水の循環だ。

水の惑星

植物も動物も、地球が生み出した水をその体に蓄えながら生きている。
私たち人間は、赤ちゃんでは約七十五%、子供で約七十%、成人では約六十～六十五%が水
で満たされている。

約四十億年前に、海で生命が誕生してから、生命の連鎖^{たくわ}と生物の進化を続けてこられたのは、
地球が豊かな水で満たされていたおかげだ。

(C) 宇宙航空研究開発機構 (JAXA)



宇宙の無数の星の中で、「水の惑星 地球」が生まれたのは偶然だろうか。それとも、宇宙は生命を生み出すために「水の惑星 地球」をつくったのだろうか。

ともあれ、私たちは、「水の惑星 地球」の恩恵に浴し、水をふんだんに使って生活している。海で、川で、水と遊び水を楽しむ。

一方で、人間が川や海を汚し続けてきたことも事実だ。川や海だったら、どんなものでも、どこかに押し流し、また底深く隠してくれると思つたからだろうか。やがて人間は、自らの過ちに気づいた。ある川では、人々の努力で水質が大きく改善され、魚が戻ってきた。

しかし、それはまだ、長い道のりの途中に過ぎない。いや、この道のりは永遠に続くであろう。

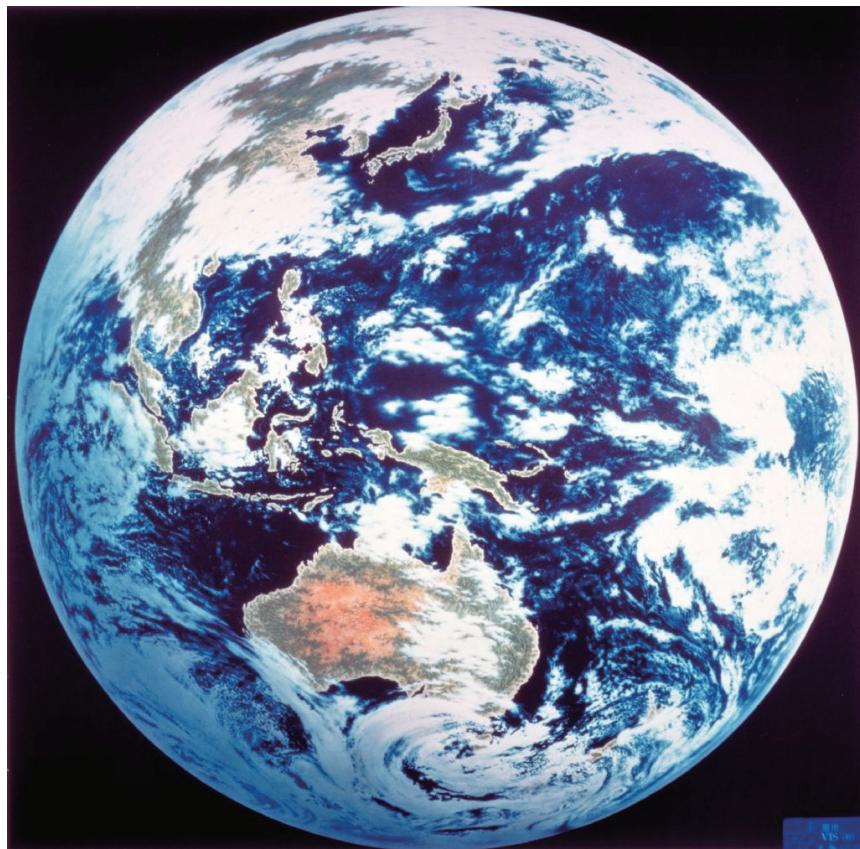
そもそも、人間は、結果を導くための原因や方法は考え出せても、全ての結果を予測はできない。それを、あたかも全ての結果を支配できることのように思い込み、思い上がってしまう人間のさがは、いかなる時代においても変わらないであろうから。

この地球に生まれた私たちが、どのように生きていけばよいかは、このすばらしい地球をつくってきた主役たちに尋ねるしかない。

いや、尋ねずともいつも私たちに教えてくれている。それに気づくか気づかないかは人間しだいだ。この渓谷の大きな自然の懷に抱かれながら、私はそう考えた。



水の惑星



(C) 宇宙航空研究開発機構 (JAXA)